

戦時期の洋裁学校卒業生たち

－ 『D・M・J会誌』 の分析－

飯田 未希

Female Dressmakers in Wartime Japan: An Analysis of *DMJ Journal*

Miki IIDA

Abstract

The question of what women should wear caused heated discussion during wartime Japan; traditional Japanese clothes looked outdated and seemed not appropriate for the age of total war, whereas Western clothes were still associated with pleasure-seeking “modern girls.” By focusing on Japanese women with Western dressmaking skills, the paper will examine how they defined their skills and in what ways dressmaking was important for them during the time when the things Western were increasingly seen as suspicious. In particular, the paper analyzes *DMJ Journal* published between 1934 and 1943. *DMJ Journal* was a magazine published twice a year for the alumni of Dressmaker Jogakuin (Women’s School for Dressmaking), informing them of latest fashion and dressmaking. The paper will focus on the section in the journal that collected the letters from the graduates. The students of Dressmaker Jogakuin were mostly from upper and upper-middle classes who had not been expected to work outside based on their gender norms. The letters show, however, that more and more graduates worked either as a dressmaker or a dressmaking instructor after graduation, and some of them moved all alone to get a job to the places they had never been before, even to the colonial cities. Their reputation was most vulnerable in the age of nationalism. Nonetheless, many of them firmly devoted to the art of dressmaking.

1. 女性洋装史における『D・M・J会誌』の位置づけ

本研究では1934年から1943年まで春と秋の年二回発行されたドレスメーカー女学院の同窓会誌である『D・M・J会誌』（以下『DMJ会誌』）を分析する。特に卒業生が近況を伝える「お便り」コーナーに焦点をあて、戦時期における卒業生たちの洋裁とのかかわりについて分析する。ドレスメーカー女学院は昭和初期に設立された洋裁学校であり、ドレスメーカー女学院より数年早く設立された文化服装学院と並んで、植民地を含む全国から学生を集めていた。この戦時期には学院の知名度は上がっており、また学生数を急激に伸ばしていた¹。『DMJ会誌』は主に卒業生が会費を払って購入していた冊子であり、卒業生が各自の動向を伝える「お便り」コーナー、卒業写真、学校での催し物を伝える「ドレメだより」など学校関係の情報以外に、最新の流行を伝えるグラビアページや学院長杉野芳子による流行解説、最新流行の服の仕立て方を教授するページ、スタイルブックを読むためのフランス語入門など、卒業生が洋裁を続けるための情報を豊富に掲載していた。また、戦争が進むにつれて院長杉野芳子の夫で理事長を務めていた杉野繁一による国策を解説する記事も掲載されるようになった。出版事業令により1943年秋号が戦中最後となり廃刊し、戦後に復刊する。

従来女性洋服の一般化は、太平洋戦争終了後のアメリカ占領期の影響（いわゆる「アメリカ化」）として説明される傾向があった。この枠組みでは、戦前は和服、戦中はモンペ、そして戦後の「女性の解放」を象徴するのが女性のスカート姿であった。戦中までの抑圧から戦後の解放へといういわば解放史観である²。これに対し、1980年代以降の女性史、ジェンダー史においては戦時の女性の「抑圧」という女性の受動性を強調するパラダイムの見直しが行われ、指導者層の知識人女性たちの活動や、主婦であった女性たちが地域活動に参加する能動的な側面に光が当たるようになってきた。これは日本の平和運動において女性を戦争の「被害者」と位置づける暗黙の了解と、その了解に基づいた戦争観に対する根本的な問題提起であった。このような「女性に対する抑圧」というパラダイムの見直しと並行して、戦時の女性抑圧を可視化する象徴的な存在であった「モンペ」が見直されている。

「パーマの禁止」と並んで戦時の女性の外見に対する抑圧の象徴として、戦時に「モンペを強制された」というイメージがメディアなどでも一般化しており、わたしたちの戦争認識の一部となっている。しかしながら、戦時期の女性の能動性を見直す動きの中で「モンペの強制」という枠組み自体も見直しが始まっている。これには三つの立場がある。第一の論点として、そもそもモンペは強制されたのか、むしろ女性たちが能動的に「選択」したのではないのか、という藤井忠俊の議論がある。藤井は国防婦人会の発生と広がり、そしてその後総動員期の防空演習など地域の活動に女性が参加するようになった経緯を分析し、モンペ着用の広がりには国から強制されたのではなく、むしろ地域活動に積極的に参加する中で、女性たちが活動しやすい服装を自ら選択した結果だと考えている（藤井 1985）³。

第二の論点として、モンペは強制されたが、女性たちが着用する際には「おしゃれ」にするために手を加えていたという枝木妙子の議論がある。女学校の制服のスカートがモンペに置き

換えられるなど、1940年代になって否応なしにモンペを履くことが一部の女性たちに強制された。モンペを若い女性たちが穿くことは、国家の関心と非常に強く結びついてしたが、実際にモンペを着用する際には女性たちは「おしゃれ」なものへモンペを作り変え、自分たちでその意味付けを共有していた。国家が強制する女性の「正しい服装」という価値基準に、女性たちが必ずしも同意していなかったという指摘である（枝木 2019）。

そして、第三の論点として、モンペが「強制」されたとされる時期についても疑義が出ている。1937年の国家総動員法の制定やそれに伴う地域組織の再編の中で一部の女性たちはモンペを着用して地域活動に参加するが、実際に多くの女性たちがモンペを着用したのは終戦に近い1944年頃からではなかったのではないかというのが井上雅人の論点である（2001）。近年、戦前から戦中の消費文化が注目されている。1930年代後半にデパートなどの売り上げは最高潮に達しており、1940年代に入っても好調さは続いていた。1930年代後半に精神総動員運動に呼応した国家主義的なプロパガンダが新聞や雑誌に躍るようになるが、また一方で消費文化も続いていたのである（井上 2001；ルオフ 2010）。そのような消費文化の一つの中心が女性ファッションであり、女性の洋装であった。そして、戦時期に女性の洋装はむしろ増加していたという。

本研究でドレスメーカー女学院という洋裁学校の戦時期の卒業生会報を分析する意義は第三の論点と関連している。すなわち、女性たちがモンペを履いていた時期が戦争末期であるなら、それ以前は女性たちはどのような服装をしていたのか。この点に関して、井上（2001; 2006; 2017）は重要な枠組みを提示している。従来の服装史および風俗史が女性の洋装を戦後の文化として位置づけていたのに対し、井上は総動員期から戦後の女性洋装の一般化への連続性を指摘している。戦後一般化した女性洋装は既製服ではなく、女性たちが家庭で自ら仕立てるか、女性が経営する小規模な仕立屋で作った洋服を着る場合が多かった。女性向け既製服が一般化するのには1970年代である。それまでの期間は、女性が洋裁の知識を洋裁学校で学び、自分および他人の洋服を無料ないし有料で作っていた。そして女性や子供向けの洋服を作る多くの女性の活動の場は「家庭」であった。このように女性が家庭で洋服を作るための技術普及における洋裁学校の中心性、及び「女性の私的活動としての洋裁」という価値観の形成が可能になったのが戦時期であったと井上は指摘している。

井上はこの戦時期に洋裁学校入学者数が激増し、家庭で女性たちが自分たちの着る洋服を作るようになるという現象を「洋裁文化」という観点から分析し、戦時期から戦後にかけての文化的な連続性を指摘している（井上 2006）。井上の議論は①時間枠の設定、②既製服以前に女性の洋服がいかに普及したかについての説明（洋裁学校の重要性と洋裁文化）など、女性の服装の変化を考える上で重要な示唆に富んでいる。その一方で、井上の「洋裁文化」の分析は、洋裁文化という「場」（ブルデュー）の形成とその中のエリート層における力関係が分析の中心となっており、家庭で洋裁に関わることになった女性たちの実際の活動についてはあまり焦点が当たっていない⁴。

本論では井上が提案している戦時期から戦後へと続く「洋裁文化」の内実に接近するため、戦時期にドレスメーカー女学院が発行した卒業生向けの会報を分析する。春（6月出版）と秋（12

月出版)の年2回発行されるこの会報は、管見では図書館などにまとまった所蔵はなく、また分析もされていない。本論文では、筆者が入手した『DMJ 会誌』の1934年秋号(第2号)から1943年秋号(第20号)までの19冊を分析対象とする。なお、1934年春号(創刊号)は現在のところ筆者が入手できていないため、分析対象に入っていない。この資料を分析する意義は、洋裁学校卒業生たちが洋裁といかに関わっていたのかを知ることができるという点である。戦時が深まる中で一方では愛国的な主張をする記事が『DMJ 会誌』のような同窓会誌でも増加するが、それと並行して「お便り」コーナーでは、卒業後地元に戻ったり、また満州、朝鮮、台湾など植民地で暮らす卒業生たちからの近況を伝える手紙が掲載されている。ドレスメーカー女学院は洋裁学校の中でも上流の女性たちが集まる場と見られており⁵、彼女たちの家庭環境において女性が職業を持つことは必ずしも良しとされない場合が多かった。彼女たちの中で洋裁が「趣味」なのか、それとも「仕事」なのか、それとも「和裁」と同じ程度の「家事」なのか、など洋裁に対する意味付けが、彼女たちの卒業後の生活との関係で様々に述べられている。また、そもそも卒業後に洋装を続けることができるのかどうかという問題もあった。地方出身者は帰郷後女性の洋装者が街にほとんどいない場合もあり、洋服を着るには勇気が必要だった。戦時中の女性たちにとって洋裁や洋装はどのような意味を持っていたのかを考える上で、この「お便り」コーナーに掲載された手紙は直接的な示唆を与えてくれる可能性がある。したがって戦時における家庭洋裁文化の形成の一つの手がかりとして、本稿では『DMJ 会誌』の「お便り」コーナーからドレスメーカー女学院卒業生の動向を分析する。まず『DMJ 会誌』の特徴と戦時中の構成や内容の変化について概観した後、「お便り」コーナーをより詳細に分析する。

2. DMJ 会誌の特徴

2.1. 会誌の構成

会誌は、写真やイラストなどを印刷した高級な白い厚地の印刷紙を使ったグラビアページと、紙質の劣る文字主体のページで構成されている。グラビアページはドレスメーカー女学院の卒業写真、ドレメタイプと呼ばれる学生が自分で作った服を着たファッション写真、流行ファッションの写真(欧米白人モデル)、スタイル画が含まれる。このうち、卒業写真と白人女性モデルが最新流行の服を着たファッション写真は、時期が進むにつれて減少するかまったくなくなっている。院長杉野芳子の上半身ないしは立ち姿のポートレートが1937年春号以降、毎号巻頭を飾るようになる。

文字のページでは杉野芳子の巻頭言、杉野繁一による意見文(学生に取ったアンケートの分析などが始めは多いが、戦時が進むにつれて国策解説記事が増える)、グラビアページで紹介された洋服や帽子などの作り方、学校行事(展覧会、旅行など)の写真付き記事、学校外の講習会、講演会などの記録、在校生による作文、卒業生によるお便り、詩、短歌、随想、などがある。この中で、あとで述べるように詩や短歌、随想などの文芸関係のページは途中で廃止される。

2.2. 表紙の変化

時期が下るにつれて、表紙も変化していく。もともとは「D・M・J会誌 No.3 Spring・1935 ドレスメーカー女学院」という横文字主体の表記であった。表紙にはカラーの厚手の紙に白抜きで三角形の中にDMJの文字が入ったデザインの上に、上記のタイトルおよび巻号数が印刷されている。表紙に最初に起きた変化は1940年秋号で、「被服指導機関誌」という文字が「D・M・J会誌」の上に記載されるようになった。そして巻号の英語表記が、1942年春号からは「春季号・2602」のように、「季節の漢字表記+皇紀の洋数字表記」という体裁に変わる。そして、1943年春号からは「ドレスメーカー女学院」という学校法人名称が「杉野女学院」に変更される。本論では時間経過が分かりやすいように、数字の号数表記ではなく、「西暦+春・秋+号」という表記に統一する。

2.3. ページ数の変化

全体のページ数は1934年春号から1935年秋号までが60ページ程度の会員名簿を含めた200ページほどの厚さとなっている。1936年春号では会員名簿がなくなり、全体が184ページである。これ以降は漸減し、1937年秋号までは170ページ前後、1938年春号～1940年春号は150ページ前後、次の1940年秋号では120ページ、1941年秋号で105ページ、1943年春号および秋号で80ページ強となっている。

グラビアページは1939年までは増加するが、それ以降は減少する。1934年春号では40ページだったグラビアページが1937年春号では60ページにもなる。最初の号数で多かった卒業写真のページ数は減り、最新流行のモデル写真、帽子などの流行小物の写真、髪形の写真、スタイル画などファッション関係のページが増加する。しかし、1940年秋号には30ページ程度に減少する。特に白人モデルのファッション写真やパーマメントなどの髪形を紹介する最新流行のページはなくなっている。グラビアページの定番だったスタイル画のページは1941年秋号以降は巻頭のグラビアとは切り離されて、会誌の中央あたりに配置されるようになる。また名称も「DMJスタイルブック（杉野芳子選）」であったが、1941年秋号では「教材用デザイン集」となり、最後の1943年秋号には「教材用絵姿集」と呼ばれている。

2.4. 卒業生による投稿

1934年秋号から1937年春号までは卒業生による短歌、詩、随筆などの投稿に多くのページが割かれているが、1937年秋号以降はこれらが掲載されなくなる。短歌、詩、随筆などの内容はドレスメーカー女学院時代を懐かしむもの、近況を短歌に読んだもの等さまざまである。これらの文芸的な投稿に対し、卒業生の近況をより具体的に記したものが「お便り」コーナーと「活躍せる諸姉の近況」のコーナーで紹介される卒業生からの手紙である。「活躍せる諸姉」は洋裁技術を使う職業に就いている卒業生たちの近況を紹介したもので、1938年春号までは毎月あり、その後は断片的に1939年秋号、1941年秋号に復活している。少ない時には3人、多い時には17人もの手紙が紹介されている。1934年秋号、1937年春号、1939年秋号、1941年秋

号では洋裁関係の仕事をする卒業生を学校職員が訪問してインタビューするというコーナーもあるが、それ以外では、卒業生からの手紙による近況報告という形をとっている。最初の数号の「活躍せる諸姉」では、「編集部から近況を知らせるよう依頼された」と説明している手紙が多い。

これに対し、「お便り」のコーナーは廃刊になる1号前の1943年春号まで継続される。このコーナーには、号によってばらつきはあるが、多くの号では卒業生の近況を紹介する手紙が20通から30通程度紹介されている(表1)。これらのお便りの内容を概観すると、ほとんどが投稿者の会誌を送ってもらったお礼、学校のイベント(展覧会など)についての感想、そして自身の近況を伝えるものである。本論では紙幅の関係上、「活躍せる諸姉」より学生の自主性が

表1:「お便り」コーナー

	お便り数	洋裁を仕事にする (「教える」+ 「仕立てる」)	教える	仕立てる
1934年秋号	34	13	6	7
1935年春号	18	4	1	3
1935年秋号	24	8	7	1
1936年春号	8	1	0	1
1936年秋号	26	0	0	0
1937年春号	20	4	3	1
1937年秋号	28	7	2	5
1938年春号	24	15	9	6
1938年秋号	43	24	11	13
1939年春号	28	19	15	4
1939年秋号	30	14	8	6
1940年春号	26	21	12	9
1940年秋号	28	15	11	4
1941年春号	28	18	14	4
1941年秋号	23	16	14	2
1942年春号	26	17	14	3
1942年秋号	20	14	13	1
1943年春号	14	11	11	0
1943年秋号	0*	0	0	0

『DMJ 会誌』1934年秋号(2号)～1943年秋号(20号)を元に筆者が作成

- * 「教える」と「仕立てる」の両方に言及している場合、両方ともカウントしているため、洋裁を「仕事」としている手紙の数はやや多めになっている。
- * 本文でも説明した金銭関係が曖昧な記述も、文脈から明らかに何らかの返礼を受けていると考えられる場合はカウントしている。
- * 1943年秋号では「お便り」コーナーは廃止されたが、比較のため「0」としている。

反映されていると思われる「お便り」コーナーに掲載された手紙の内容に絞って、以下でより詳細に分析する。

3. 「お便り」コーナーについて

3.1. 投稿された手紙の傾向

表1は手紙の内容から卒業生が洋裁に関わる仕事をしているかどうかを判断し、「仕立てる」仕事と「教える」仕事に分類したものである。洋服を仕立てる仕事とは、家で人から頼まれて服を作るような、いわば「家事」の延長上のような仕事から、洋装店を自分の事業として経営したり、また洋装店に就職するなど場合があった。洋装店では洋服生地を販売したり、また型紙に合わせて裁断したり、オーダーメイドの洋服をデザインしたり、仕立てたりすることがあった。デパートで働く場合にはデザイナー、販売員などの分業があったが、卒業生はデザイナーとして働いている場合が多かった。また教えることを職業とする場合も仕立てる仕事と同様の広がりがある。家に友人を招く延長上のような教え方もある一方、単発的な講習会を開催したり、また継続的な事業として研究所や学校などを作る場合もある。この「仕立てる」仕事と「教える」仕事を合わせたものを「仕事としての洋裁」として分類している。お便りコーナーを概観すると、自分の近況として洋装店で働いたり、また学校で教えたりという「仕事としての洋裁」という位置づけの手紙が時代を追うごとに増加する。

1937年秋号までは洋裁を仕事とする人の割合はそれ以降に比べて低い。この1937年秋号までを本稿では便宜的に「初期」と呼ぶ。これに対し1938年春号からは洋裁を仕事とすることを伝える手紙が半数を超えることが多くなる。この1938年春号から1940年春号までは、洋裁を仕事とする人が増えるだけでなく、「仕立てる」仕事をしている人からの手紙の割合が高い。この時期を「中期」と呼ぶ。これに対し、1940年秋号以降はお便り数の総数に占める洋裁を仕事とする人の割合は高いままであるが、仕立物等の仕事をする人からの手紙の割合は減少する。この時期を「後期」と呼ぶことにする。

3.2. 初期のお便り：洋裁を続けられない悲しさ

初期の手紙で多いのが、洋装を続けられないことの嘆きと、その理由として地方に住んでいることを挙げる手紙である。家事育児の忙しさのために洋裁を続けられない、また本当は洋裁の勉強を学校でもう少し続けたかったのに、家族の事情や結婚のために勉強をやめたことが今でも悲しい、などの手紙も散見する。また田舎に戻ると誰も洋装をしていないので洋装で外出するのが難しい、という手紙も多い。洋裁をしている人が少ないため、洋装に関する情報が少なく、流行遅れの服装をしているのではないかという不安を持つ人も多かったようである。例えば1936年春号のお便りで、久世すゑ子は以下のように述べている。

子供服だとか自分の平常着など、ミシンは絶えず使っていますもののやはり在校当時のよ

うなわけにはいかず、流行とか生地などの知識に取り残されたような気がしているとき、会誌を送っていただいで新たに希望が湧いてきますことをいつもいつもまことに嬉しく思っております。・・・いろいろと趣味の良いものを作りたいというのが望みなのですが、当分は家事に追われてしまいそうで悲観しております (165-166)。

スタイルブックなど洋装の流行を知るために参考になる情報が手に入りにくい地方都市や農村部に帰った女性たちは、子供服などの洋裁は続けていても、自分が洋装をするのは難しいと考える場合が多かった。当時のドレスメーカー女学院卒業生は「流行の洋装」を非常に重視していたため、久世のように「流行とか生地などの知識」が不十分でと感じると洋装そのものができなくなってしまうことがあったようである。

3.3. 職業としての洋裁

このように初期の「お便り」では、家事などの忙しさのために洋裁を続けることができなかつたり、続けていたとしても子供服を作るのみであったりする場合が多かった。これに対し、表でも明らかなように、1938年春号くらいからは、お便りコーナーでは洋裁を続けているだけでなく、洋裁を職業にしているということを伝える手紙が増加する。初期にも洋裁を続けているという手紙はあるが、初期と中期以降との違いは、中期以降は洋裁を「職業」ないし「仕事」として捉える人が増加しているという点であろう。洋裁技術を使って洋服を仕立てる仕事につく場合も、教える場合も同様である。これは単に被雇用者が増えるというだけではなく、洋裁を金銭的な対価を受け取る「経済活動」と位置づけることにためらいがなくなる、ということでもある。逆に言うと、初期には金銭的な対価のある仕事であることをはっきりさせない書き方が多い。仕立ての方で見えていくと、例えば、1935年春号で福岡の山本与志枝は、冬の間は福岡では洋装をする人は少ないが、夏になると増えるので、「今から友達が夏の服を作ってくれと約束に参ります」と伝えている。この場合、「友人」に対して無料で作っているのか、それとも有料なのかははっきりしない。また、1936年春号の小泉貞子は、「卒業致しましてからも友人のお頼みを受けたりドレスメーカーのデザインをという方に元型だけでもとお話しをしたり勉強になりますように心がけております」と述べ、「友人のお頼みを受け」るのが金銭的関係なのかどうかに関しては言及しない。また、ドレスメーカーのデザインを友人に教えるにしても「お話ししたり勉強になりますように」というのが、茶飲み話程度のことなのか、それとも対価を要求できる程度のものなのかについては曖昧である。

これに対し、例えば1939年秋号の小笠原のぶをは「私事お蔭様で益々忙しくなり毎月ドレスの注文も縫いきれぬ位ございました」と述べ、「注文」と言及している。さらに単なる賃仕事にとどまらず、洋装の仕事を事業にして自分が経営者になる、というような感覚が中期から後期にかけて強くなっていく。例えば1938年秋号で、豊橋の小山あい子は、洋裁をこれまで「お稽古事」として教えていたが、「御免状」を出す、より正式なものにしたいと院長杉野芳子に相談する手紙を出している。

豊橋に帰って三年余りにもなりました。自分が生まれた土地とは申せ、田舎のこと、随分辛いこともございましたが、学院の名を恥かしめないように励んでまいりました。今では少しは知られるようになり、ますます責任を感じております。今まで規則通り参ります人も少なく、他のお稽古の傍ら洋裁をするのでございますので、御免状もございませんでしたが、やはり欲しいと申してまいりました。甚だ勝手なお願いではございますが、御免状を作りましてよろしくございませうか。皆の励みにもなりますので、何卒よろしくお願い致します。豊橋も大変因習的な土地でございましたが、最近洋裁教授所が大変多くインチキなものも盛んにやっておりますが先生のご教授の賜物にて私の所には良くわかる人が多く感謝しております（142）。

「大変因習的」な土地柄で洋裁を教えるのに苦労があったにも関わらず、小山は洋裁教授を続け、他にも洋裁学校が乱立するようになるにつれて、彼女の競争心に火が付いた様子が伝わってくる手紙である。それと同時に「インチキ」な洋裁学校もあるが、自分の生徒は「良く分かる人」であること、すなわちドレスメーカー女学院のスタイルを理解できるような若い女性の中でも上層のグループを生徒として持っていることを伝えている。このように「ささやか」に始めた学校や教授場がより大きく正式なものになるという発展を伝える手紙は非常に頻繁に便りコーナーで紹介されるようになる。また、「ささやか」に始めるつもりが想定外に大きくなったという便りも多い。1940年春号の渡邊淑子は北海ドレスメーカー女学園を開校したが、「私もおかげさまで無事五日開園いたすことができましたが、生徒が意外にも四十人の多きに達し何かしら呆然とした形でした」と伝えている。

3.4. 洋裁を続ける意志：結婚と洋裁

初期には「結婚」を女性の仕事とみなすことで、洋裁を続けることをあきらめる文面が多かった。しかし中期以降になると、洋裁を仕事にしていない女性にしても、「ドレメで学んだからには洋裁で何かしたい」という気持ちを表明するパターンが増加する。例えば1938年春号で速成科卒業の精松ノリ子は、「僅か四カ月の短い修養期間ではございましたが、私の得ました洋裁知識は田舎の鹿児島では十分でございますの」と述べつつも、「毎日毎日更にもう少し学院で勉強が出来たらどんなに現在以上の立派な知識を得て身のために大きく申せば郷里鹿児島のためになったろうと思っておりますが、許せない事情のためにあきらめております」と述べ、洋裁を使ってもっと郷里鹿児島で活躍したいのにできない悔しさを伝えている。洋裁が、女性が経済的に自立する手段だけでなく、さらに「郷里鹿児島のため」になるような技術であり知識であるという位置づけになっている。洋裁を続けることは、このように「プライベートで自分の趣味の服を作る」というような私的な活動という位置づけから、「女性洋装を広める」という社会的意義のある活動として捉えられるようになっていた。

また、彼女たちは仕事に「やりがい」を求めるようになっていく。「先生の御名を恥しめることはできない」という定型化された文句が就職した女性や学校を設立した卒業生の手紙には

度々現れるが、それは逆に考えると、母校ドレスメーカー女学院の名を背負ってやるにふさわしい仕事を自分がするのだという決意を表すものであろう。したがって、中上流の家庭の若い娘達が就くような、腰掛け的な仕事には失望する卒業生もいた。1938年春号で、渡邊邦子は以下のように伝えている。

ただ今のお店は紳士服が主ですから、主人もあまり婦人服に重きを置いておりませんので、布地などはほとんどサンプルだけ、そして入用の者は取り寄せている有様です。・・・私にとってはとても楽なお勤めですけれど、この先の発展する見込みのないところではとても張り合いがないと思いますので、母ともいろいろ相談いたしております（103）。

要するに、仕事が簡単すぎて「発展する見込み」がないため、母親と相談して転職を考えているというのである。ただ「発展する」仕事というのは、楽ではない。このような上層の家庭の女性たちが就職する場合ですら、大変であった。例えば1939年秋号で紹介される村瀬きぬ子は洋装店で働いているが、「勤務（住み込みで朝は起床とともに夜はほとんど十二時の就寝）で身体は綿の如く身は服と共にミシンと共に一つとなってやっている程、殊に時季と申しますとこんな有様でございますので、勉強には大童になっても追いつかない程」と伝えている。「身体は綿の如く身は服と共にミシンと共に一つとなって」も、最新の洋装の「勉強」するため、村瀬は母校で開催された更生服の展覧会を見学し、その感想も掲載された手紙で詳しく伝えている。このように本気で仕事をする、そして職業を続けるために洋装の「勉強」を続ける必要があるということが、お便りコーナーで紹介される手紙では繰り返されるようになる。

このような洋裁職業熱の高まりの中で、「結婚」は彼女たちの洋裁生活をあきらめるためのファクターとしてはあまり登場しなくなる。例えば1937年春号の石黒富佐代は「結婚ということにぶつかってしまいました」と述べるが、「幸い仕事にも少しは力を注ぎうる家庭に恵まれましたので事情の許す限り専念に仕事の上に力を注ぎたい」として、「家庭」が「仕事」の障害にならないこと、また「事情の許す限り」仕事に専念することにすると告げている。結婚が洋裁を断念する理由であったのが、結婚しても洋裁を続けるというのが手紙の中でも当たり前とみなされるようになってくるのである。また藤本ドレス研究所を開いた藤本昌世は1939年秋号で結婚したことを告げているが、「主人はまだ勉学中の者にてますます自分の立場の重大さを感じております」と告げている。彼女たちが職業として洋裁を続けることは、「家庭生活」を維持するために必要ですらあると認識されるようになっていた。

3.5. 未知の土地を開拓する：満蒙開拓のメタファー

ドレメを卒業して故郷に帰ると、女学校の同窓生や近所の人達が集まってきて仕立物や洋裁教授を頼まれるようになった、というのが、先に見たように初期から非常に頻繁に登場する近況紹介のパターンである。このパターンでは、金銭的対価という側面を曖昧にし、「頼まれたから始める」という形で、状況に対する卒業生たちの受動性を強調していた。女性が職業を持

つことが一般的ではなかった中上層の女性たちにとっては、金銭的關係を曖昧にして、なおかつ受動性を強調することは、洋裁を「仕事」とすることによって生じる階層的なジェンダー期待とのコンフリクトを避けるために役立つのだと思われる。しかし、多くの卒業生たちはその遠慮がちな自己弁護の枠組みを一気に飛び越えてしまう。そのジャンピングボードとなっていたのが、当時の満蒙開拓のメタファーであった。満蒙開拓は主に男性に開拓を勧めるものであったが、ドレメ卒業生たちは「洋裁未開の地」を「拓く」という開拓のメタファーを通じて自分たちの洋裁を通じた活動を捉える場合が多かった。例えば、1935年春号の吉川とし子は、福島に帰郷した後の生活を以下のように綴っている。

もっと東京で研究するつもりで卒業しましたが、止むない事情で帰省致しました。田舎に帰ってでも立派に研究できると——高石先生に力づけられてささやかながら友達や近所の方等の注文で少しづつ縫っておりますけど、材料も思うようながありませんし、土地の人があまり洋装に対する知識がありませんので、時には泣きだしたくなるようなこともございますが、未開地を耕すつもりで、先生の御名を傷つけないよう一生懸命で努力いたします（72）。

女性の洋装に対して土地の人が無理解なため「泣きだしたくなるようなこと」もあるが、「未開地を耕すつもり」で洋裁を続けたいと決意を述べている。「未開の地」とは、まさに当時の「東京以外」の女性たちがいかに正しい洋装を知らないかということを強調するために使われた、卒業生たちに共有されたメタファーであった。高田ドレスメーカー女学院を開校することになった是永君子は、1939年秋号で帰郷した後「こんな田舎では・・・と兎角くずれ勝ち」だった気持ちを立て直して学校を開くことにしたと伝えているが、その中で彼女が住んでいる地方の女性洋装の様子を伝えている。

昨年までは半袖のブラウスの下からシャツの袖が出たりタイトスカートの下からスリッパが五糎位出た格好で平気で街中を歩く方が多うございましたが、今春からは相当整った洋装の方も見うけられるようになりました。昨年の夏などはお客様が和服にお太鼓を結んだまま、「この上から寸法を計る様に」と仰ってドレメ時代と余の違いに大分まごまご致しましたが、近ごろはわざわざお洋服に着替えていらっしゃるようになりました。近頃益々洋裁熱が盛んになり、街を通る若い人の半分が洋装と言ってよい位になって参りました（102）。

是永も「このような未開の土地故多少の困難は伴いましょうが、それだけやりがいもありますことと存じます」と洋裁学校を開きたい旨を伝えているが、「未開」というのがどういう状態であるのかがよく分かる手紙である。「スリッパがスカートの裾から出ている」ということは、少なくとも西洋式の下着であるスリッパを女性たちが着用していたということである。この当

時洋裁家たちが新聞や雑誌などで「洋装の下着」について啓蒙的な文章を書いていたことを考えると、是永が住む地域がまったく「遅れていた」とは言えない。しかし洋装店に和服で来て、帯をお太鼓に結んだ上から採寸させられる等、洋服をどうやって作るのかについてまったく無理解な顧客を相手にしなければならない苦労は相当あったと思われる。

このような「未開地」は、洋装に理解のない帰郷先だけではなかった。まさに彼女たちにとって未知の土地に出向く場合もあり、しかも戦時が深まるとともに、この傾向は強まっていく。足利、札幌、前橋等さまざまな未知の土地へドレメ卒業生たちは就職のため旅立って行った。このように卒業生が遠方に就職することが一般化すると、宝塚歌劇団衣裳部などドレメ卒業生が集中する職場が現れ始める。これは内地だけではなく、京城の丁子屋デパートなど植民地においても学校出身者が集中する職場が生まれ、植民地で「就職」したり、また事業を起こすことを伝える手紙が増加する。

3.6. 植民地に住む、植民地で洋裁をする

したがって植民地開拓のメタファーは単にメタファーだったのではない。卒業生の中には実際に植民地に出て洋裁の仕事を始める人が多く出始めていた。植民地との関係で考えると、ドレスメーカー女学院で学ぶ女性たちの中には①長く植民地になっている台湾や朝鮮半島に家族が植民者として住んでおり、そこから東京に留学して、また植民地に帰郷する外地出身者、②卒業までは内地に住んでおり、結婚後に夫の赴任先として植民地について行き洋裁を始める（もしくは始めない）内地出身者、③卒業後自分で植民地に渡り洋裁関係の仕事につく内地出身者、④植民地先住民で東京に留学し、また植民地に帰郷する外地出身者、という4パターンが存在する。また北京等植民地化はされていないが、日本人が多い中国の都市部へ渡る、というパターンもある。初期のお便りでは①や②のパターンが多く、夫や父親など家族の赴任先や入植先が植民地なので同行している、という受動的な立場から書かれた手紙が多い。したがって、手紙の内容も東京の友達や洋裁から離れるさびしさを伝えるものや、夫の赴任地の女性たちの洋裁を観察する手紙など、仕事として洋裁を意識するものは比較的少ない。例えば、1934年秋号で、斎藤倉子は、「東京から帰ってからの京城のさびしさ、本当に泣いても泣ききれないくらいでした」と述べ、洋裁仲間から遠く離れた心細さを伝えている。

しかし、このように受動的な手紙は次第に減少し、植民地を職場として積極的に捉える手紙が増加する。例えば、1938年春号で、辻外喜は「当地に弟が勤めておりましたので、新興の都市で洋裁を始めるのも面白いかと考えまして昭和10年11月に渡満いたしました」と述べ、これまでは満州で洋裁の個人教授をしていたが、正式な学校にしたいという主旨を伝えている。また同じ1938年春号で台湾の秀眉洋裁研究所で働くことになった斎藤貞子は以下のように伝えている。

こちらに奉職いたしまして一番感じましたことは、洋裁熱の思ったより盛んなことで、割り算もできないような人達がよく教えてくれと申してまいります。ここの資格は公学校卒

業以上でございますが、あまり熱心なので秀眉先生もついまけて入学をお許しになった人も五六人おります。はじめわたしは速成科の方に出るつもりでおりましたが、生徒は内地の言葉が全然分からず、私も台湾語はさっぱりなので説明しにくく、今は研究科の方を受け持っております（106）。

斎藤貞子は台湾の現地の言葉も話すことができず、また現地の生徒たちが日本語をほとんど理解しないということも知らないまま台湾の洋裁学校に就職したようである。現在の視点から見てやや驚くのは、植民地に渡ることに對して、当時の女性たちがかかなり気軽な調子で書いているということである。例えば1939年秋号で金子貞子は「私も来年早々奉天に行き、ある子供服店に勤めることになりました」と述べ、「子供服店」に就職することが彼女にとっての重要事項であり、「奉天に行く」ということには比重が置かれていない。また三菱ミシン京城支店で働いていた松田千代は、1938年春号で「どなた様からも非常にデザインが分かりやすいとのお言葉をいただきまして、これも偏に先生のおかげと今さら身に染みてありがたく存じております」と述べ、京城という場所をことさらに大げさにはとらえていない。そして、「京城にもドレメの同窓生が大分集まりましたから、春にはまた一度お集まりいたし、皆さまとご一緒に研究させていただき、益々この道に精進いたす覚悟でございます」と述べ、内地の地方都市だけではなく、植民地でもドレメネットワークが存在することを伝えている。実際、1939年秋号のお便りコーナーでは、京城ドレメ支部会のメンバー30名の集合写真が掲載されている。そしてこのようなドレメネットワークがすでに存在することが、さらに新しい卒業生を呼び寄せる誘因になっていた。

4. 考察

4.1. 構成の変化をどう考えるか

『DMJ 会誌』は期間全体を通してみると、出版停止、検閲、用紙配給などの取締権限を持つ国（内務省警保局、その後内閣情報局）との関係を編集部は強く意識している。学校法人の名称変更や表紙の変化、国策的な論調の文章の増加などは、検閲と用紙配給を意識した対応であると考えられる。会誌はまた明らかに用紙配給統制の影響を受けており、影響はページ数の減少と紙質の悪化として表れている。なお『DMJ 会誌』は1943年の出版事業令によって廃刊が決定したため、1943年秋号以降は戦中は出版されていない。

これに対し、卒業生の投稿内容の変化は、読者である卒業生の意見を反映した編集方針の変化であると考えられる。1937年頃までの『DMJ 会誌』では、卒業生による詩、短歌、随筆等の投稿に多くのページを割いていた。しかし、この時期以降は、読者からの投稿はお便りコーナーの近況を伝える手紙と、「活躍せる諸姉の近況」のコーナーで紹介される職業を持つ卒業生の手紙のみになる。1937年春号に掲載されている「本誌を語る座談会—DMJ 会評議員春季例会」では、①短歌、詩、随想などは読まないで掲載をやめてほしい、②卒業写真などにペー

ジを割くのも無駄なのでやめてほしい、③スタイル画や作り方解説のページをもっと増やしてほしい、④会誌の出版時期を春号秋号ともにもっと早い時期にずらしてほしい、という4点の卒業生読者からの要求が紹介されている。これらの要望は、主に地方でスタイルブックが入手困難なため、会誌のスタイル画を参考に注文服を作っている卒業生たちからのものであった。④の「出版時期を早める」という要望は、従来の出版時期（春号6月、秋号12月）だと、シーズンの流行を取り入れた注文服を作るのに間に合わないためであった。会誌の出版時期の変更は編集の都合上無理であると会議では結論しているが、短歌、詩などのページを減らし、よりスタイルブックとして洋裁の役に立つ誌面にするという要望は対応されている。実際この1937年春号以降は、短歌などの文芸的なページは廃止されており、より洋裁に実際に役立つ情報が多く掲載される傾向が強まっている。

4.2. 「お便り」の手紙の内容の変化について

4.2.1. 洋裁を仕事にする卒業生は増加したのか？

それでは、ドレメの卒業生のお便りについては、どのようなことが言えるだろうか。全体的な変化としては、初期の洋裁を続けられない環境について嘆く手紙から、中期以降は洋裁を仕事にするという手紙が中心になる。この変化についてはいくつかの解釈が可能である。第一に、実際に卒業生の中に洋裁関係者が増えたというよりも、洋裁に関わっているということ「伝えたい」と感じる卒業生が増えた、という可能性である。「お便り」と並行して置かれていた「活躍せる諸姉の近況」では、初期には編集部の方から洋裁を仕事にしている卒業生に手紙を書くよう依頼していた。遠慮がちなが仕事について語る卒業生の手紙を読んで、自分の仕事のこと手紙で紹介したいと考える卒業生が増えていった結果、「お便り」で仕事に関する手紙が増加したとも考えられる。同様に、第二の可能性としては地方の洋裁業を営む卒業生の関心を反映した誌面にするという編集方針の変更のため、仕事に関する手紙が多く紹介されるようになったとも考えられる。この場合も、実際に洋裁を仕事にする卒業生が増えたのかどうかはわからない。

しかしながら、第三の可能性として、洋装に仕事として関わる卒業生たちが実際に増加したということも考えられる。お便りの中には、地方に帰った後、洋装の女性が増加していることを伝える手紙や、地方に帰って洋裁学校を開いたところ大挙して入学志望者がやって来た、という手紙が特に中期以降は増加している。実際、婦人之友編集部が1937年5月に行った「全国19都市女性服装調査報告」（『婦人之友』1937年6月号）によると、女性の洋装率は植民地諸都市は高いが、それ以外にも金沢、盛岡、静岡が30%を超えており、鹿児島も全国平均の26%を上回っている⁶。モダンガールが揶揄された昭和初年に今和次郎らが行った銀座調査では女性の洋装率はわずか1%であったことと比較すると（今1987）、その後の10年で女性の洋装は地方都市ですら確実に増加していた。これは、ドレメを卒業して帰った女性たちが仕事として洋裁に携わることを可能にした条件でもあり、また逆にこのような洋裁学校卒業生たちの活動が地方都市での洋装女性の増加を後押しする（ないしは可能にする）ことになったとも考

えられる。

4.2.2. 洋裁を続けることの意味

洋裁を仕事とすることを、女性たちはどのように意味づけたのだろうか。これには、三つの特徴的なパターンがあった。まず第一に、帰郷後に女学校の友達や近所の人から「頼まれ」て、仕立物をしたり洋裁を教えたりするようになったという受動性を強調する物語枠組みである。このパターンでは金銭的な関係が曖昧に言及される場合も多かった。女性が職業を持つことが一般的ではない中上流階層の女性たちにとって、「人に頼まれる」などの受動性や「ごく家庭的」などの事業規模の小ささの強調、そして金銭的な関係を曖昧なままに止めておくことは、彼女たちの属する階層の女性規範を踏み外していないという意思表示であった可能性がある。

これに対し、第二として、洋裁を卒業生自身の「人生の目的」と位置づけるパターンも存在した。これまで見たように、このパターンは中期以降に増加した。この洋裁を「人生の目的」と位置づける枠組みは、洋裁の社会的意義を強調する場合が多かった。ただ単に「自分のため」に洋裁を仕事とするのではなく、洋裁を教えることが「故郷のため」になる、という言い回しが、卒業生たちが学校や洋裁店を開く際の説明として頻繁に使われた。これは当時の何に対しても「報国」的（「お国のため」）であることを求める風潮を逆に利用したとも読める意味付けである。地方都市では昭和初期の「モガ」のイメージ、すなわち個人主義的で享乐的な洋装女性のイメージがまだ残っている場合もあり、「故郷のため」を強調することで、女性たちは洋裁仕事を正当化することができたのかもしれない⁷。

第三のパターンとして「開拓」のメタファーによる洋裁業の説明がある。この開拓のメタファーは、ドレスメーカー女学院がある東京と他都市との違いを強調し、東京を他都市より突出して「先進的」と位置づけるものであった。例えば「関西開拓」という場合、関西の洋装文化よりも東京の方がすぐれていることが前提であり、当然関西は東京より「遅れている」と位置づけられる。また、このメタファーを通じて、卒業生は他校出身者や他都市の洋裁業者よりも自分たちを「優れた」存在として、いわば「洋裁エリート」として位置づけていたと言える。地方の洋装を見ることで、彼女たちは自分たちの学んだ「ドレメタイプ」と地方の洋装の違いを進歩／未開という対立軸に位置づけるようになった。このように地方の洋装の「遅れ」を語る中で、地方の洋装を「遅れた」ものとして見分けることができる「私達」という意識が共有されるようになっていく。開拓のメタファーを通じて、いわばエリートとしての「ドレメ卒業生」という集団意識が形成されていくのである。

さらにこの開拓というメタファーが非常に興味深いのは、この比喻を使うと内地の地方都市も植民地の都市も同じ「未開の地」として位置づけられるという点である。東京と並ぶ大都市であった大阪ですら、ドレメ卒業生にとっては「正しい洋装を知らない人があまりにも多い」洋装未開の地と位置づけられることも多かった。国内都市にも「開拓」「未開の地」などの言葉を用いることは、逆に植民地（「外地」）の異質性を、卒業生たちの認識の上で軽減する方向に向かわせたとも考えられる。すなわち大阪、今治、仙台などの内地の諸都市が「洋装未開の地」

であるならば、京城や奉天、台北にどれほどの違いがあるのか。少なくとも、ドレメ卒業生が家族や夫の赴任に帯同するのではなく、自ら植民地諸都市に働きに行く際には、「内地」と「外地」という区別は大きくは働いていなかったように見える。それを可能にしていたのが、この「開拓」のメタファーだったのではないだろうか。

おわりに

本研究は戦時期に発行されたドレスメーカー女学院の同窓会誌のお便りコーナーの分析であり、非常に限定的な資料に基づいた議論である。これまで見たように、お便りコーナーで紹介される卒業生たちの洋裁を通じたさまざまな活動は、卒業生や当時の洋裁学校卒業者に直ちに一般化できる性質のものではない。また上記の植民地に関するメタファーなどは、より広いコンテキストの中で分析される必要があるだろう。さらに本稿では戦時期の女性洋装全般についての議論も紙幅の都合上できなかつたため、戦時の女性洋装の中でのこの資料の位置づけを十分に分析することもできなかつた。これらの課題については、次稿以降で深めていきたいと考えている。

注

- ¹ ドレスメーカー女学院はこの1930年代半ばには、毎年入学者が1000人前後になっていた。また同じく有名であった文化服装学院は、1938年頃までは1000人弱だったのが、1940年頃に入学者が急増し、1942年には3000人を超えるマンモス校になっている（文化服装学院1990）。
- ² 女性洋装と戦後風俗史との関係については、井上（2017）。
- ³ 中山（1987）はズボンやモンベが普及したのは戦争末期の空襲が始まった時期からであると考えており、1930年代後半の総動員期にモンベが広まったとする藤井の議論とは時間枠的にはずれるが、ズボン・モンベの「機能性」を女性たちが自ら選択したとみなしている点において、藤井の議論と共通している。
- ⁴ 本稿では井上（2006）の「洋裁文化」の定義を最も参考にしている。井上（2001; 2017）では「階級差・性差のない身体観」の成立が「洋裁文化」の成立と連動していることが強調されているが、筆者は女性たちが家庭で洋裁をするようになったという現象的側面の説明が、必ずしも井上が指摘する身体観と不可分である必要はないと考えている。また、井上（2001; 2006; 2017）による、「洋裁文化」が「消費活動」であるという定義に関しても筆者は同意していない。生産／消費の概念上の区分は近代的な性別役割分業観の成立と分かちがたく結びついており、フェミニストが問題化してきた一つの論点である。そして、本稿の分析が示すように、この点は卒業生たち自身が争ってきたポイントでもあった。
- ⁵ ドレスメーカー女学院だけでなく、文化服装学院等当時の洋裁学校は女学校を卒業して通う場合が多く、比較的生活レベルの高い家庭の女性たちが入学する機会が多かった。洋裁学校は「職業」というよりは「教養」を教える学校として認識されていた（井上2017）。
- ⁶ 昭和初期に流行した「アッパッパ」以降、女性の洋装は夏の方が冬より多かつたため、冬に調査するとこれより低い数字が出た可能性は高い。
- ⁷ 国家主義的なレトリックを女性たちが「利用」していたとすることは、ドレスメーカー女学院卒業生たちが国家主義イデオロギーとは距離を置き、イデオロギーを「内面化していなかつた」とする議論と表裏一体となる。「利用」という言葉は主体の独立性と自律性を強調するため筆者が意図するところより強

い表現であるが、現時点でより適当な言葉が見つからないため、上記のニュアンスを含むという前提でこの言葉を使用する。国家主義的言説との距離感は、卒業生たちの手紙をより詳細に分析することである程度示すことができるはずであるが、本稿で分析できる範囲は超えている。この課題は次稿に譲りたい。

分析資料

『DMJ 会誌』1934 年秋号～1943 年秋号、ドレスメーカー女学院 DMJ 会。

参考文献

- 井上雅人 2001『洋服と日本人 ― 国民服というモード』廣済堂出版。
- 2006「関西における洋装文化 ― 藤川学園の例を中心に」『関西文化の諸相 関西文化研究叢書 1』武庫川女子大学関西文化研究センター。
- 2017『洋裁文化と日本のファッション』青弓社。
- 枝木妙子 2019「非常服としてのモンペの〈流行〉― 第二次世界大戦期の新聞や婦人雑誌の記事に着目して」『アート・リサーチ』19号 15-24。
- 今和次郎 1987『考現学入門』筑摩書房。
- 中山千代 1987『日本婦人洋装史』吉川弘文館。
- 藤井忠俊 1985『国防婦人会 ― 日の丸とカッポウ着』岩波書店。
- 文化服装学院 1990『文化服装学院教育史 ― 創設 70 年のあゆみと未来』文化学園。
- ルオフ、ケネス 2010『紀元二千六百年 ― 消費と観光のナショナルリズム』朝日新聞社出版。

